〈資料翻刻〉永代美知代「デツカンショ」（2）

有元伸子
板倉大貴
萬田慶太
熊尾紗耶

〔52〕

（五）

如何にもやり切れない思ひで、三嶋屋さんのお店を出て来た美子は、ずつとその儘真直ぐに進んで行つたが、此方の側はまだ今迄、一度も来た事がない。此の駅路の昔の本通りか。以前農具の修繕か、□□職だつたらしい、縁側もない古びた家の、破れ障子を開け放した部屋の中に、牝鶏が一羽コトコト歩いて居たり、少し離れたその隣家も、その又隣りも、小さな小暗い田舎家ばかりが続いて並ぶ。その中の一軒で、表の部屋のあがりがまちに、老媼が一人腰かけて、眼鏡越しに頻りと、針のめど通しに悩んで居る。又少し離れた、横手の家の前の土間に、大勢の子達が集つて、石けりか何か遊んで、ワイワイ騒ぐ。

〔53〕すべてわびしく、目下の美子の気持ちに、焦立たしさを添へるばかりだ。同じ歩くなら矢張り、三嶋屋さんから此方の側の、お邸地帯に限る。美子は引返して踏み切りを渡つた。どうせ配達は、子供上りの小僧さんだから好いけれど、今度移転して来た私の家を、三嶋屋さんかお内儀が、その眼で見たら堪るまい。

『何だいこれは？駅の近くの最初の小径を、秋本子爵のお邸近くまで歩いた、その取つ着きの、小さいけれど、まだ木の香の新らしい門構えで、格子戸造りの二階屋だなんて、小さいにも何にも、こんな小つぽけな門がどうなるもんか。飛び石の三つも置いてよ、早速玄関の格子戸とは、門は門でもなつてない門だ。これで石門の御一門とは、呆れた聞きもんの驚ろきもんだよ』位な地口の、駄戯言は屹度飛ぶ。

醤油と味噌と房州砂の磨き粉を、二度目の時に注文したあの時の、三嶋屋さんのお内儀〔54〕の顔が、ふと美子の頭に浮んで見えた。

『はい、畏まりました。二階屋の永川さんで、はい、解りました』

とは云つたが、お内儀の頭の中のおとくい帳には、薄墨でほつそり書かれた位の、うろ覚えのものではなかつたか。

『それで結構。はつきり解つたら、結局困り門の、やり切れないの骨頂門だわ』

美子は、苦笑した。幾らか心が落ちついた、その証拠に、これだけの地口の戯言も云へたのだ。美子は更らに苦笑した。だが徒らに苦笑してばかり、居られる場合ではない。折角耳にした、あの定連の噂さ話の細目を、一々メモにして、何とか然るべき所置を講じなくてはならぬ。

先づ第一番に大事な項目は、何と云つても畳表ての一件だ。

『美子さん。お宅では、郷里からお歳暮に、何をお貰ひになりました？』

『朝鮮鰤ですよ』

〔55〕『四つ谷の伯母様も、さうですつてさ。私の処、何だとお思ひになりますこと?』
『矢張り鰤でせう。嘉例にまかせてね』
『鰤も頂きましたけど、困りましたわ。備後表が百畳なのよ』
『好いぢやありませんか。何をそんなにお困りなの?』
『だつてさ。表替へするには、職人の手間賃が、大変なのよ。私、本当に困るわよ』
『左様かしら?』
『美子さん御存じないけど、職人の手間賃て、馬鹿高なのよ。本当に私困つちやうわ』
『何もお困りの事ないでせう。職人の手間賃なら、御心配ないでせう。去年の春以来お庭の芝生の、草取り女の手間賃其他、家の臨時の雑費一切と一緒に、とつくに最う郷里から綺麗に、お取り立て済みになつてるぢやないの。今年もその通りでせう、些少ともお困りの事ない筈よ』
ギヤフンと参つて、それつきり黙つてしま〔56〕つた、あの時の嫂を思ひ出し、美子も流石に気がさして、如何にも鬼千疋振りの自分が嫌になる。かと云つて定連の噂は云ふ。
『今時備後表の百畳も送られてさ、何処の世界に困つた困つたで、愚痴る奴があるかつてんだ。罰当りめ!』
『余り有閑過ぎて、職人の金儲け仕事まで、見るのもしんきと来るんだね』
『馬鹿にしてら、甚い有閑だ』
『だがよ、豪気なもんぢやないか。此の畳表のお高い当節、而も本場の備後表でよ、毎年畳の表替えと来る邸つてのは、本郷向ケ丘の阿部屋敷位なもんだ。広い東京だつて、他では余り聞か無い話よ。阿部様は元来、備後は福山の御城主だもの、備後表はお国名物で通りもんだ。だが石門のお邸は、同じ中国筋でも岡山県だとよ。岡山県なら備前だろ。わたしや備前の岡山育ち、米のなる木はまだ知らぬ。ホイ、その備前表に居てゐてさ、備後表とはこれ如何に?』
〔57〕『さては何にも知ら無いナ、備前の花ござつてのが、近来莫大、輸出方面に発行してるんだぜ。それに君、阿部邸は本郷向ケ丘と来らい、してまた石門の植村さんはつていと、矢張り向ヶ丘の一高教授で無いか、どうせ向ヶ丘同志だ。如何する〳〵テツカンショ!』
『違い無いのデツカンショ!』
単に石門の植村さんで、通つてゐた時代なら兎も角、一高の教授と知られた現在、何とかしなければならぬ――それが美子の一番の悩みだ。
先づ兄さんから郷里へ、至急速達の手紙を出し、今後畳表は勿論、その他贅沢な贈り物一切を、断り度いと懇願させる。それが第一だ。そして此の際私の義務は、兄の家庭に苦言を呈し、生活改善の決意を要求する事だ。
美子は最近、嫂と話した会話を思ひ出し、吐息した。
『ねえ、とつてもよく出来た、謎々があるのよ、お教へするわ『模造の果物籠』ホホホ如何〔58〕?』
『その謎々、解らないわ』
『あなたに解らない筈ないわよ。ねえ、一高教授の薄給ですとさ。うがつてるわねえ』
『さあね』
『見る眼が如何にも立派でもつて、一見誰でも飛び着くけれど、実際はとても甚い。如何にも食べられない、手に取つて見て初めて解る。如何?悲惨ぢやない?本当に笑つたわホホホホ』
『解らないわ。笑へて悲惨つてないでせう。笑へる以上、愚痴る必要ないんぢやない?』
『え?』
『現に嫂さん、一高教授の薄給で、愉快な謎々だと、頻りに御自分で笑つてらつしやる。それが立派に証明してると云つてるの』
『解らないわ、今度は私の方で解らない』

『難かしいわね。よりよき半身つて難しい』
『ベタアハアフつて、英語で伴侶ぢやない』
『左様よ』
〔59〕『もつと委しく教へてよ』
『兄さんにお聞きなさい。兄さんは英語の教授よ。私に聞くより、美子がさう云つたつてお聞きなさい。はつきりちやんと、解るやうに、教へて貰へるわ』
美子は心の底から吐息した。あれだもの、兄さん一人で出来る決意ぢやない！
そして又思ふ。
人間誰にだつて、それ〳〵多少の相異はあるけれど、生れながらに附いて廻つた権利もある。利得もある。背景もある。無家賃の家宅に住んで、著書の印税を持つ者位、兄さん一人と限るまい。印税以上の収入ある余裕を持ちながら、而も奢らず、誇らず、所謂一高教授の薄給によつて、万事万端の生活が、支へられて居るかの様な、いとも倹ましく、謹厳な教育家らしい生活様式の教授が、世間には可成り多いに相違ない。自然と頭がさがる。ギリギリ一杯、本当の意味に於ける薄給と云つた、少数の例外なきにしもあらず、かも〔60〕知れぬ。でも左様と解れば、尊敬の思ひは却つて深い。それを何ぞや、われこそはのあの優秀顔と来たら、フフ片腹痛い嫂さんだ。模造の果物籠を、喰へない薄給の謎々だと、矢鱈面白がつて、笑つて愚痴つて、大勢の女中達に、子供の世話も家の用事も、すべて、おつぽり任せで、毎日閑つぶしに出歩き廻はる、さうした教授のよりよき半身では始末におへぬ。
『おゝ、忘れてならぬメモがある』
又一つ、美子が執り上げたのは、定連の話を聞いて居て、ピンと来た、贅沢な嫂の衣装の話だ。
『今度花見衣装に、とても素敵な袷を作るのよ。碧がゝつた晴々しい鳩羽鼠の着尺にね、気取つた静海波を深めさせますの。帯は黒地の三本絽を使つてさ。背中のお太鼓と前の胸下に、ほんのり桜鯛をきかせた、明るいおつな色合ひの糸を撰んで、幾通りか器用に使ひ分けた、絽繍としやれるわよ。ねえ、三越の〔61〕あの番頭ね、例の私の係りの白井さんが言ふのよ。袖も身ごろも前後揃へて、上の部分は小さく細く、段々裾へ大きく染めた静海波に、処々、余り小さ過ぎない程度の、着色本□□の枝を、適宜に飾つて縫いつけますの。そして、薄すら鴇紅色がかつた可憐な桜貝を、如何にも本物らしく蝶貝で造らせ、ウンとふんだんにばらまくと、そこはかとなく、晩春の渚の情緒がみなぎつて、思ふ存分海岸の気分が味はへるわね。其処へ又、絽繍の帯の鯛の、眼玉に、本物の小粒の真珠をはめこむと、至極立派に引立ちますつてさ。如何？美子さん、如何お思ひになること？』
『如何つてたゞ、嫂さんらしいお思ひつきだと、聞いてゐるだけよ』
『何とか仰有つてよ』
『如何にも凝った染物ね。前と後と静海波が倒さにならない、それだけで、とても凝つた贅沢な、特別染ね。それで結構沢山よ』
『左様かしら？』
〔62〕『其処へ見る眼も可憐な、桜貝をばらまく位は、ともあれ、それ以上蛇足よ、呆れたわ』
『蛇足？本当にさうお思ひになる？』
『全然悪趣味だわよ、私は断言します。絶対に好きませんとね。序に植村一高教授のよりよき半身として、嫂さんのお召物でない事を強調します。直言すれば、物笑ひの種だと言つてる訳ね』
『本当？』
『世間でよく云ふわね。羽織の一枚も作れば、ちょいと羽織つて出かけて、他人に見せびらかし度いのが、人情ですつてさ。そんなお笑ひ草の花見衣装など、うつかりお作りにならないに限るわよ』
其様まで苦言を敢へてして、諌めて置いたつもりだが、呆れた嫂さん！それを着込んで、東久邇の宮様へ伺候した。それを自慢に三嶋屋

さんのお店にすら、散々しやべつて、吹聴がましい。

『宮様からね、『早いね』とお褒めのお言葉頂〔63〕いたのよ』に至つては、泣くにもなけない。常連の言つた言葉を、その儘借りれば――

『のほうずも無い話ぢや無いか』

宮様へ御伺候と言ふのも、以前嫂の実家で頼んだ、家庭教師の一人が、其後上京して、東久邇の宮様の御祐筆だか、御調度掛りに上つて勤めて居るのがある。現在でも昔の師弟関係で、お互いに往復してゐるその婦人の、縁故をたよつての事なのだ。実家自慢も程によりけり、それしきで、宮様をひけらかされては、余り畏れ多くて、どうにも話にならぬ。

（六）

何しろ小学校きりで、上の学校のない田舎の事だ。進学させるには、少し撰り好みをすると、神戸か京都か乃至は東京だもの、如何しても寄宿舎に入れる以外、方法が無い。早くに母親をなくした幼い娘を、見知らぬ他人の中で、冷い風に吹かせたり、世ち辛い浮世の塩に揉ませるのは、如何にも気が進まぬ祖〔64〕母の意見から、どうせ上の聟取り娘から、次ぎから次ぎへ一番末まで、四人も揃った女姉妹だ。一人だけにつける家庭教師と云ふではなし、専門のをそれ〴〵十人迎へたところで、二人同室ならお部屋に困る事はない。おたからとはよく云つたものだ。米味噌醤油尽くお田から出て来る。毎日食べきれぬ程玉子を産む鶏も、食用の雄鶏も、皆なお田からのおこぼれで間に合ふ、間に合ふどころか、余つてすたれて居るではないか。

野菜は勿論、木小屋の軒に、椎茸も栽培してあるが、ほんの一歩、裏山に踏み出せば、春秋の山菜が何でもある。わらび、山うど、茸は松茸まである。香茸、しめじ、なびこは取り放題、その余の茸は踏んづけて、すべつて転ぶ程ある。鮎は山寄りの川瀬に、鯉なら大きな堀のいけすから、邸の庭の広い金魚池に移して、何時なんどき入用に事欠かぬやう、泥をはかせてある。無いものは海の魚と肉類だけだ。

〔65〕地主と言つても、所謂お年貢地主で、直接自家で田地を耕作す農家でないから、牛馬は飼育して居ないが、牛でも豚でも、肉類に不自由はしない。邸の両側に続いて小一丁に亘る竹藪には、孟□、破竹、真竹、五三竹何でもある。雪を冠つた二月の初旬から、ニョキニョキ出て来る筒が、半夏を過ぎた後まで、まだかと呆れる程、絶え間がない。いざとなれば早速、万事を心得た爺やが、注文の品を一筆書いて、走り使ひの小僧に渡せば、町の肉屋から、入用なだけ幾らでも持つて来れる。後で肉屋が出向いて、頻りと揉み手をして頼んで、筍を掘らせて貰ふ。代金などめつそうもない。てんで受けつけない。爺やが若い男を呼んで、小僧と一緒に手伝はせ、自家のリヤ車を貸して、うんとこしよ積んで持たせて帰へす。海の魚もその轍だ。どうせ人手はありあまる。邸の周囲の菓樹から、柿でも桃でも、葡萄でも、時々のものをもぎつて置いて、毎朝廻はる魚売人に渡せば、鯛でも鰆〔66〕でも望み次第、何とでも変へて行く。胡麻の油を沢山しぼつて、神棚のお燈明にまで用ひて居るが、奥の食用には、特製の椿油がつかはれる。

左様だ。塩がない。砂糖がない。素麺と干□がない。みんなまとめて買つて、塩は塩噌倉、砂糖、素麺、干□は別棟の料理場の二階にある。毎日煮ないためしのない小豆のあんこに、入用おかまひなし。使用人共がてんでに間を見て、拾ひだめした栗は、あんこにまでつぶした余分を、乾して置けばかちぐりになる。西條柿をむいて、縄にはさんで吊して乾す、吊し柿は、お正月の福茶に用はれるゑんぎものだ。どつさり造つて、歳暮の品に添へて、親類縁者に落ちのないやう必らず贈る。何も彼も有り余るものばかりだ。先生がたの食費を計算に入れる必要はない。大局から見て、大した学資の相違もない。純情な娘に育つに限ると、すつかり箱入りの世間知らずに育つた人だ。それが何とした譯合ひで新〔67〕進文化の尖端を切つた郷里の父母と、アメリカ仕込み新帰朝の兄と、揃ひも揃つたハイカラでありながら、祖母育ちの箱入り娘を嫁に迎へる、此の縁談がなり立つたものか、縁は異

なもの味なもの、まして家と家との結婚時代だ。当人同志の結婚は、家柄、門閥、格式と、この条件が揃はない限り『私の撰んだ理想の人を見て下さい』なんて、根つから相手にされつこない。殊には碌に背景の親類縁者もない、ひとりぽつちの貧乏者の、苦学生を撰んだものなら、忽ち慮外者の不孝者呼はりだ。親でもない子でもない、勘当が普通だ。如何かしたお慈悲で、僅かに親兄弟と往き来が出来れば、感泣の至りで居なければならぬ。親の方では、切つても切れぬ慈悲でもあらうが、犬にでも呉れてやる調子で投げられた真珠は、真平御免だ。感情の清算なしでは、物質的恩恵など、口一文嫌ふこと！酢でも昆弱でも、何でもよろしい。どうにかやつて行く、意欲一つで結構。と言つた気にもなる〔68〕。ぐるりからも、お茶人ものの変人扱ひだ。『嘘言でも何でもない。現にこの私がその代表的モデルだもの』

兄は二度目の結婚で、最初の嫂に子供は残されなかつたが、左様した事情も、多少のハンヂキャツプともなつたであろう。但し手跡もよし、日本絵なら年賀端書に、賀正と書いて、その下に、丹頂の鶴を添へた処は、万更らでもない。ちよいと容貌はよし、如何見ても良家の出らしい、落ち着きがあつて、何処となく上品だ。兎もあれ箱入りだけに、てんで世間を知らぬ。広い日本にどれだけ、大した金持ちがあるものやら、考へて見た事もないかも知れない。井の中の蛙同様、せまい周囲の地下の人達から、へいこら頭を下げられ、湯水のやうに人手を使つて、何でも彼でもふんだんに、ゆつたり育つた者が、急にせかせか息詰るやうな、都会の生活に比べるせいか、何かの序には実家自慢だ。

大なり小なり、それによつて、多少の相違〔69〕はあるが、田舎の地主の生活は、東北から九州まで、みんな似たり寄つたり、何を特別珍しさうに、自慢する程の事があらうか、もつと大きな地位がザラにある。

三嶋屋さんのお内儀が、小切手の談を持ち出した時、美子は赫とした業腹まぎれに、出来る事なら、いきなり飛び出して、思ひ切り怒鳴つて見たかつた。

『はゞかりながら、ポンポンながら、嫂の実家のお蔭でもつて、切らして貰つてる『植村直美』の小切手ぢやないことよ。ヘン、郷里の父が子供の病気其他、火急の場合の用意のために、兄の留守中、唉嗟に出せる嫂の名前で、十六銀行に預金した、それがあればこそ。誤解されては迷惑だわよ。』

何故あんなにもいきり立つて、一途に怒鳴りたかつたか、美子は自分ながら気持ちが解らない。だが如何冷静に落ちついて考へて見ても、小切手問題を此儘にして置けない、気持ちで一杯だ。三嶋屋さんのお内儀の話では〔70〕、此の界隈のお邸でも、夫人名儀の小切手は、二人とないさうだ。自分一人だと言ふ優秀感が、人一倍尊大気分の嫂を、何処まで有頂天にたゝつて行くか、終には変にのぼせ上つてしまはないとも限らない。現に最う枝さんごや、本物の真珠で飾った衣装を着込んで、宮家に御伺候の一件を、得々と吹聴し廻つて居るではないか。

『どう見ても正気の沙汰ではない！

この小切手の問題は案外難かしい。此際断然嫂の手から取り上げ、そのあと一切、お取りやめにするのが、一番だけれど、今迄盛んに書いて居たものを、急に全廃する。それで世間体が悪くないで済むかしら？怖らく嫂が承知しない。かと云つて兄さんはあの通りの麿さんだ。面倒な帳簿の始末が出来るか如何か、どうも不安だ、心元ない。郷里の手で何とか、嫂を説得して貰ふ以外、手の打ちやうもない。たゞ此際十六銀行の豫金を、兄さん名儀に書きかへさせる。それだけは必らず実〔71〕行の必要がある。

『嫂さんの神経系統に異状はないか、どうかしてるんぢやないかしら？』

美子は全く気が気でない。これ以上散歩するのも嫌になつた。一度自宅に帰つて、永川に小切手問題を、如何所理したものか、相談に乗つて貰つては如何か、とも考へる。

『嫌な事だ！元来他人の金銭問題にタッチするのを、大嫌ひな僕だと知つて居て、何を云ふ？とりわけ植村家の事に就いては、猶更らだ。君だつて止し玉へ。一旦おん出た癖に、何の真似だい？と云つて、その余の事は、自から別問題だがね。金銭問題、物質問題、僕は知らん、こればつかりはノウ、タッチ。ノウ、タッチ！』

忽ち不機嫌になるのは必定だ。仕事も読書も出来なくなる。何を苦しんで、左様した気持ちの掻きまぜに、帰る馬鹿があらうか。

『私だつてこんな風では、童話の続きも書けやしない。仕合せと、その童話の〆切りまで〔72〕、まだ四五日の余裕もある。今度の談判はこれつぽつち、永川に知らせず、済んでしまつた後の報告が、一番よろしい』

又散歩を続けて考へた。

『これで若し、十六銀行預金書きかへに反対して、実行出来なかつたら、兄さんも案外、腰抜けだ。第一植村家の誇に関はる一大問題だ！』

力んで云つたが、ふと眉根を寄せて、苦笑した。

『フ、フ、嫂さんの実家自慢を笑へやしないわ。自分からおん出て来て、ほんの駆け出しの新聞記者兼、折角書いた試作一つ、まだ売つた事もない、貧乏文士の細君風情が、今更ら植村家の誇もないもんだわ。フ、フ』

美子の気持ちは、如何にも割り切れない。

『人間誰しも、産れた家はひいきなものか、私も矢張りそれらしい』

美子は頻りに考へた。自慢とひいきはまるきり違ふ。誇と書けば、些か自慢の慢に似て〔73〕誇がましい。豪慢な嫌ひがあつて、少し如何かと思ふ気持ちもするけど、襟度のプラウドは、同じプラウドでも、誇のプラウド程に、嫌みがないやうだ。じつくり落ち着いた文字に見へて来て、何となく快よい気分が漂ふ。聞く耳にも自然と心地よい響を持つから、不思議なもんだ。流石語学者の妹だけに、近頃大分かぶれて来たらしい――

『何でもよろしい。譯が解らなくては、どうにもならぬ。持つて産れた私の気分も、これで兎に角割り切れた。善は急げだ。早速出掛けて、談判を上手に切りだすことだが、兄さん一人だと一番都合が好い。万一二人共在宅だつたら、如何しよう？』

美子は順序を考へた。

『三人となると話が込み入つて、兎角時間が長びく怖れがある。そつと耳うちして二人きり西洋舘で談合と決めればよい。嫂さんの手前は、例の言譯で事は済む。』

『最初に持ち出すのは、何と云つても金の問〔74〕題だ。細目を成るべく早く形着ける。そのあと、女中を使つて永川を迎へ、彼方と此方のの夫婦四人で員数を作り、久し振りにブリッヂを遊ぶのも面白い。

『その間中、兄さんは、私から提出した談判など、まだ何も聞かない顔で、じつと胸に畳んで居て貰ふ事。私と永川が帰つた後、嫂さんの前に初めて談判を持ち出し、御夫婦御両人だけで、じつくりと、その解決に就いて色々考へる。

『随分難かしい話だから、ゆつくり時間をかけて、矢鱈嫂さんを怒らせぬ事。兄さん自身も無暗に昂奮して、喧嘩にならぬやう。絶へず指導者たる自覚を持ち、しまひには嫂さんを了解させ、納得させる事。

『万一最悪の場合、火花を散らした喧嘩ともなれば、マッチを摺つて、頻りに焚きつけた自責上、呼んで貰へば、私はいつでも駆けつける、それも一言告げて置く必要がある。傍に居て、仔細に火の廻り具合、方向、程度を〔75〕観察しながら、揉み消し、給水あらん限りの力を尽し、あくまで完全な消防の実を挙げなければならぬ。それだけの自信もある。

『一方、嫂さんの方だが、運よく在宅なら、一人の方がこれまた、望むところだ。新婚当時から、持つて産れた癖であらうか、ほんの僅かな馬鹿気た事でも、事もこまかに、取捨分別の弁別はない。時と

場合のけぢめもない、およそ戸主の留守中に出来した程の事は、何でも彼でも御前に持出して、言上に及ばなければならぬ性分だつた。一族からちくいち言上の守の、別名を奉つられた人だつた。一高新任のあの頃でさへ、外でどんな事件が起つて、どんなに大変な気苦労して来たか、一切おかまひなしだ。お帰りの顔を見るが早いか、最う初めて居た。

『私、困るわよ。さだやがね、おいとま頂きます。母の病気を知らせて参りましたつて。嘘言よ。口実だわよ。困るわ私』

『困つたの、まだあるのよ。三越からあなた〔76〕の大島紬のお羽織が届いてます。でも困つたわ、井の字は派出だ。蚊がすりが好い、早く電話でさう云へと仰有つた事、つい忘れて、電話しないうち、井の字の方がチヤンと、お羽織りになつて来ましたの。困つたわ。矢張りお派出よ。お召しになれない？だつてこんなにお早く仕立てるなんて、思つても見なかつたのよ。悪かつたのは私だけど、困るわ私、お電話忘れて、御免なさい』

こんな調子で、私から持ち出した談判は、そつくり其儘、兄さんの耳に入る事受け合ひだ。文字通りありの儘で、おまけも何もない。□を烏の機智どころか、一言の嘘言も、顔を真紅に染めないでは云へない人だ。名は体を表はす。直美とはよくもつけられた。世間知らずの我儘で、其点困つたものだが、嘘言の云へない、純真なその性格は、実際見上げたものだ。絶対に信用出来る。

『細目を順序通りに運ぶ事』

美子の足は、石門へと向けられた。

〔78〕

（七）

例の問題の難かしい談判も、どうにか形着いた其後、程すぎて美子は石門を訪れた。例の言訳の仕事にかゝるつもりで、兼て渡されて居る、戸の鍵を廻して、いきなり西洋舘に入つた瞬間、美子はハツとした。

四辺一帯、妙に空気が変だ。兄一人の筈のデスクの椅子の横に、もう一つ並んだ倶楽部椅子に、珍らしく嫂がかけて居る。

『如何かした？』

訊かずには居られない。二人共此方に会釈の眼を向けたが、如何にも様子が変つて見へた。

『今日は私、何も難かしい談判なんか、持ち込まないのよ』

『左様だらうね』

何だか白々しい。

『でも私達、散々やつてたの。美子さん、ね、聞いてよ、兄さんてばね、例のあの如何と〔79〕何故の意義まで持ち出すのよ』

『だつてあの意義、もうとつくに、けりがついてたんぢやない？』

『兄さんてば、又候、それを初めて、散々私をいぢめるの、くどいわよ』

『お察しするわ。でも兄さん一人ぢやないのよ。御辛抱なさい。学校の教授を永くやつてるとね、誰れでも皆な、聴講生に見へるんですつて。だから又始まつた位で、黙つて聞いてれば、結構好いらしいの、教授の方でやるだけやると、チラツと腕時計に眼をやつて、今日はこれきり。左様ならで、済んぢやうわ』

『馬鹿にしちやいけない。ハツハツハツ』

教授は笑つたが、ミセスの機嫌が、とかく如何にもほぐれない。

『いろいろ聴講のお蔭で、言葉の意義は解つて居ても、言葉は国の手形でね。お国なまりの原因をつい、うつかり使つたばかりに、散々なの、私だつて赫つとするわよ『どうせ私〔80〕は田舎育ちの、馬鹿で御座います』つて云つたのよ。すると又からんで来て大変なのよ』

『此の人は時々、馬鹿になりたがる癖があるんだよ。だが、馬鹿どころか、此人位な馬鹿なら、当節ザラにはない才女で通るさ。ねえ、美子、その点、君だつて認めるね。僕はそれを惜しんで云つてるんだ。意欲一つで、時々馬鹿になりたがる必要がない。馬鹿どころか、

立派に才女になれる。惜しいぢやないか、何故ならない？意欲一つだ！』
『解つたわ。意欲一つね。大いに賛成よ』美子は云つた。
『此処の家庭では、言葉の意義で、終始ゴタゴタするわね。元来語学者だから当然かもしれないわ。私とても好い材料を一つ持つてるのよ。但し、その材料は、当事者以外、絶対にごたごたを起しつこない、その点、些少と物足りなくつて、お淋しい嫌ひがなくもないけど、如何にも愉快なの。そんなの時には好いわよ。三人で御一緒に笑はない？つい二三〔81〕日前に仕入れたばかりの、ホヤホヤを提供するわ。笑はせるのよ。ホツホホ」
美子は愉快に笑つて見せた。
『嫂さん、その倶楽部椅子を兄さんにお譲りして、長椅子にいらつしゃい。私と並んで笑ひませう』
『では僕も倶楽部椅子に移つて、大いに落着かう』
美子が提出したホヤホヤの材料と云ふのは、つい四五日前、さる教会の集会に出席して、美子自身直接体験の、仕入れであつた。
集会のあと、永年教会の理事をやつて来た、S氏が云つた。
『実は、私、今度、会社から欧米視察の旅行を、特に命じられました。最近、いや、来週横浜出港の何々号で、およそ半ヶ年間の旅程を決定致しました。就いては一言、皆様に御報告かたがた、日頃の御厚情を謝し、皆様の御健勝と御幸福をお祷りして、以て、お別れの言葉にかへさせて頂きます』
〔82〕丁度その場に居合はせた、教会の宣教師が、S理事と兼ねて知り合ひであつたのは、云ふまでもない。一人は永年この教会の理事である。一人は同じ教会の宣教師。深く結ばれた友情の関係でないにしろ、たゞ通り一遍の知り合ひと云つてのける程に、淡々しいものでもなかつたのは、およそ察しがつく。其処に誤解が持ち上つた訳だ。
『おゝ、アイ　ミス　ユウ！』
宣教師が特別、ミスに力を入れて云ふと、S理事が拳を握つて叫んだ。
『私をミスするとは、何事です？実に怪しからん。私は永年此の教会の理事をつとめた、ミスタアSですぞ！その私をミスするとは、おゝ蓋し、憤慨に堪へませんね』
『おゝケダシ、ワカリマセン、フンガイニタエマセンネ』
宣教師が眼をパチクリ、驚ろき呆れたのは云ふまでもない。この宣教師はとても熱心な勉強家で、日本語をローマ字で書き、一生懸〔83〕命習つて居る。少し位カタカナで書きもする。他人の話を聞いて、或る程度むつかしい事も解る。但しそれはこの宣教師が、元来篤学家であり、博士であり、知識人であるからであらう。他人の話を良識によつて判断し、察して解る。だが併し自分で話すことは、まことに不得手だ。自分で思ふ事が、万分の一は愚か、億兆分の一も話せないと、いつも自分で嘆く、怖らく、私達日本人に於ける、英会話と同じ苦しさ、同じ焦れつたさであらう。
『ワタクシ　ヨク　ワカリマセン、ホントニアナタノコト、ゼンゼン、ワカリマセン』
たどたどしい日本語で、宣教師が懸命に云へば云ふ程、ミスタアSの昂奮は愈々高まり、益々烈しく極度に達し、果ては身を慄はせて怒号した。
同席の殆んど誰もがS氏の社会的優秀な地位を知り、会社から特に撰ばれて、欧米視察に派遣されると云ふ話を、今も今、而もS氏その人から、直接聞かされたので、宣教師〔84〕と二人の間に、如何割り込んで仲裁したものか、英語の全然解らない、老人達がまごついたのは当然だ。そしてどう云ふ訳で、このミスが持ち上つたか、それが解る程の老紳士達は又、S氏の社会的地位に対して、遠慮し、おもんぱかる点もある。思ひは同じ教会の牧師、副牧師、理事長の面々、皆な尽く、たゞ文字通り、ぼんやり突立ち迷つて閉口するばかり、徒らにお互の顔を見合つた。
そのうち後の方でクスリ、横でクスリ、彼方でも此方でもクスリ、クスリやり出した。と、突然プウツと大きく吹き出すテンエイヂヤア

ズ、幾ら自制して堪へようとして居ても、何がさて、箸が転んでも、昔の娘達は笑つたそうな。時代が違つて居ても、根が同じ年輩の、お若い淑女達だもの、無理もない。教会の婦人会の人達は、会長を始め、役員達みんな、まるで御自分がしでかした、まことに申訳もない、怪しからん失策か何かのやうに、真紅な顔の眉根を寄せて、如何にも困つた〔85〕風で、すつかり俯向いて、じつと足元ばかり見つめて居た。

『成る程ね。S氏と云ふその当事者に対し、甚だ相済まん気もするが、そいつは如何も変手古りんで、イヤハヤ云ふに云はれぬ喜劇と云へば、余りにも失礼だ、つまり不思議千万な場面とでも云ふか、ハツハツハツ』

『永川はね『笑へぬ場面』だつて、云つたわよ。ですから私達、自宅に帰つて来て、とても笑つちやつたわ』

『解らないのよ。説明して頂けない？』

『さう来なけりや嘘言だ。問ふは一代の恥、知らざるは永代末代までの損だ。元来此のミスなる言葉は間違ひで、誰でも知つてるやさしい言葉だ。而も実にミスし易い言葉だよ。但し最初のMを大きく、大文字にしてMISSとすると、確呼とした素敵な意味の言葉になる。即ち未婚の令嬢の尊称だ。その尊称によつて、断じて間違はれないミスだ。おまけにだよ、ミスに続けて其名を呼べば、花の如〔86〕き未婚の令嬢を、連想せざるを得ない』

『お言葉ですけど、兄さん、ミスはミスでも婚期を逸したミスに、花の如き令嬢の連想は、無理ぢやない？』

『如何だかね。或は然らん。処で婚期を逸した、未婚のミスの場合、流石は淑女に対する礼儀で、面と対つて呼びはしないが、普通誰でも屹度、そのミスの前に、老の一字を内証で添へるのが習慣だ。自然花の如き令嬢を連想する代りに、まことに花恥かしい老嬢の俤が、忽ちピンと胸に来る』

『ウツフフフ、好いわね。そして、それが英語だ。でせう』

『左様だ。此のミスの貫禄の素晴らしさ。立つて居ようが、横に寝転んでゐようが、未婚の令嬢の尊称にゆるぎはない。如何間違へられる心配もない。だがそれに引きかへ、小文字ばかりのミスは、普通間違ひの名で知られ、クリケツトを遊べば球を逸してしまつたり、捕物を射れば射損じる。兎角やり損ひのミス〔87〕をやる。だが愛情の本家本元、ラブ以上の情緒を、たつた一語に含めて、ウンと腹芸で行く役もやる。処が世間には、とんだ周章て者が沢山ある。殊には入試の場合、血眼者で、うろたへ廻つて居ると、猶甚い。あゝあのミスなら知つて居る、の早合点から、いきなりヒヨイと書く。試験場で貫つた大事な用紙だ。私は汽車に乗り遅れ、で次ぎのに乗る手はない。翌年までのまる一年間、嫌応なしの浪人生活だ』

『今度のS氏だつて、お船をミスした位だと、あんなに怒らなかつたけど、永年の交際で居ながら、名前を思ひ出せないとは、怪しからん、の憤慨ね』

『だから怒鳴つたんだ。処で宣教師は、たつた一語で意味深長な、愛情の言葉ミスを用つて云つたんだぜ。私はあなたに行かれると、実に淋しい、とても堪らない気持ちですとね、その腹芸もののミスをミスされて、ワタクシ　ツライ　ホントニ　ナサケナイ　アリ〔88〕マス』

『たつた一言で、意味深長を表現する時、短刀直入、寸鉄人を刺すで行く場合の『アイ　ミス　ユウ』を、如何云つたら好いでせう』

『あなたが居ないと淋しい』

『素敵よ。如何？嫂さん『あなたが居ないと淋しい』お互彼氏に応用しない？』

『美子さんの仰有ること！』

（八）

倶楽部椅子と長椅子の間に運ばれた、マホガニイの茶車に、並んだ紅茶のセットが、如何にも楽しい、お茶時らしい気分を見せて、四周に漂ふリプトンの香も好もしい。

『今度三珍社と云ふ本屋が出来てね、新らしい雑誌を出すさうだ』
植村教授の話に、美子が早速訊いた。
『どんな雑誌？』
『まだ初号も出てないんだ。どんな雑誌だか、具体的説明は出来ないが、つまり和、漢、〔89〕洋の三つから、いろいろ珍な話を拾つて載せる、それがねらひらしい』
『自然英文法の植村教授へ、早速駆けつけて、何が何でも、是非御原稿を頂き度いと云ふ訳ね』
『頻りに云はれてるんだ。度々むだ足ばかり踏ませても、気の毒だと思つてね』
『お書きになつたら如何？』
『然るべき例題もがなと、いろいろあさつて、丁度と云ふのを、ねらつてるんだよ』
『例へば？』
『先刻まで話して居た、あのミスが最も適切かな』
『ではその、丁度適切な例題を、早速お使ひになると好い』
『僕の方の入学試験でも、ミスに就いては、随分いろんなミスが多い。何れは皆な、相当な成績で卒業して来た、優秀な進学希望者ばかりと思はれるが、『私はあなたを間違つた』だの、『私はあなたを捕へそこなつた』と云つ〔90〕た具合に訳し、澄して書いたのが可成りある。相当教養ある家庭に育ち、定めし高級な学校を出た筈の、あのS氏でさへ『アイ　ミス　ユウ』を完全に解つて居ない。振つた例題で、確かに研究の価値がある。斯様云ふ問題が、ともすれば世間に起り勝ちなのも、要するにだよ、言葉の持ち味を、完全に知り度い、熱心な意欲と努力がないからさ。のみならず、単に科学的方面に於ける、見解にのみ重点を置き、飽くまでそれによつて、語学を習得しようとする、其処に原因があるんだよ』
『左様ね。犬猫のやうな、あんなものにだつて、ミヤウだとかニヤーオとか、ワンだのウオツだの、聞いて一々解る、鳴き声がありますものね。まして況んや、人間だもの、人間の言葉に於ておやと云ふ訳ね』
美子は嫂に呼びかけた。
『ねえ、嫂さん。如何？他人の誰にも解らない、赤ちやんのかたことが、母様のあなたに解るわね。何処が痛いのか、お腹がすいてる〔91〕のか、ねえ？』
『そんな簡短なこと、何でもないわ、まだ何ものを云はない、赤ちやんの泣き声で、ちやんと解るわよ。でもね、余程考へなくては解らない、生命懸け首をひねつても、どうにも解らないで、泣きの涙の難しいのも、時にはあるのよ。でもね、根が母子ですもの、解らないまんま、打つちやれないわよ。死ぬより辛い思ひで泣きながら、彼様か斯様かと考へるうちには、自然としまひに解るのよ』
『不思議なやうでも、つまりは懸命に湧き立つ、強い母性愛の絶へざる注意と、熱烈な意欲による、貴重なたまものだわね』
『それだ！』
教授は強い語調で、手を打つた。
『僕が頼りに云はんとして居るのも、つまりはその一点にある—
『私はあなたを愛します』『あなたが居ないと淋しい』この二つはどちらも三字で組んで、アイで始まりユウで終る。而も同じ愛情表〔92〕現の言葉ではないか。
　処で、英語なるものが、遠い西の海の外から、東海の果てのこの日本に、初めて持ち込まれた、あの明治から大正の当初今日まで、やつと数へて五十年そこそこだ。にもかゝわらず、津々浦々の果てから果てまで、ついぞ今まで聞いた事もなかつた筈の、英語の『アイ　ラブ　ユウ』が若い男女は勿論、ほんのまだ小僧つこの口の端にまで、あまねく普及してゐるではないか。呆れたもんだよ。その訳は、人間誰しも感応するところの愛情を、表面切つてヅバリ、丸出しにして居るからだよ。だが真正面から人心に体当りの露骨さだけに、人と場合によつては、眉根をひそめずには聞かれず、語られ

ない。然るに一方、『アイ　ミス　ユウ』は、一向執りあげられて居ない。どころか、世間一般に、その存在をすら知られて居ない。これ亦、呆れた有様だ。

と云ふのも中にはさまれた、ミスの一語が、余りにも謹しやかに、ラブに勝るとも劣ら〔93〕ぬ、愛し恋しさを、じつと心にひめて、そつと囁やく其処にある。その優にやさしい、ミスなる言葉を取りあげて、何故情緒漂ふその意義を、知らうとはしないのか、只徒らにミスして居る、僕にはそんな無茶苦茶な話は解らんね』

『ヒヤ、ヒヤ』

『斯様考へると、其処にデリカシイな言葉の持ち味を、味ふ事が如何に意義あり、価値あり、おろそかに、捨て置かれる筈のものでないのが、染々解る』

『どちらも三字でゆく『アイ　ラブ　ユウ』と『アイ　ミス　ユウ』の表現に就いて、講壇の上で大いに強調してよ、その効果たるや格別よ』

怖ろしく感激して、美子は云ふ。

『私の見本など、本職の教授の前で、甚だもつて片腹痛い、お笑ひ草は百も承知で、殊には今の今、講議を拝聴した受け売りで、重復にもなり、恐縮ですが、其処は素人の事で、〔94〕盲滅法、蛇なんぞ些少とも怖くない。諸君とやるわよ――

諸君！たつたの一語でもつて、斯くも深長な意義を持つ、このミスが、更らに『アイ　ミス　ユウ』の三字と結んだ場合、諸君が常に、非常な熱意をもつて歓迎し、さながら恋愛の守護神ともあこがれ仰ぐ――と云つては些さか語弊もあるが、少くとも愛の本尊キユウピツトが、ハツシと射下す白羽の矢『アイ　ラブ　ユウ』の三字に等しく、正しく愛の権化の言葉となる。否、否、LOVEの言葉のやうに、正面切つて露骨に、いきなり愛の言葉を切り出さないだけに、愛し恋しに、懐しの思ひさへ添へ、あなたが居ないと淋しいわ『アイ　ミス　ユウ』とそつと謹しやかに囁く。この三字が、どんなに深い感銘を、聞く人の心胸に与へるか。諸君よ、思つても見玉へ、殊には別して、死ぬ程想思の人を残して、あたら旅立つ、別離の情緒堪へやらぬ場合に於て、断腸悲痛の涙に、むせび泣かざる〔95〕冷血漢が、果して此の世の何処に存在し得ようか。諸君！この愛情の言葉『アイ　ミス　ユウ』を知らずして、この素敵滅法素晴らしい一語を知らずして、知らない俱徒らに、研究の意欲なきものが、万一諸君の中に、たつたの一人、有り得たならば、私はその無神経さに、呆然として驚ろかざるを得ない。この意欲なくして、この愛情の言葉『アイ　ミス　ユウ』の意義を知らずして、如何して青春を語る資格があらうか！

一日一刻も早く眼覚めて、共に青春を語り玉へ！深く切に望んでやまない！

『うけるわよ、兄さん！以て他山の石ともならば、光栄これに過ぎないわ』

『他山の石どころか、是非その見本で行かせて貰ふよ。如何だい？いつそ君、女流弁士で立つ気はないか、それ位なら、結構うけるのは、君自身だよ』

『冷かしつこなし。本気になつて、自家の二階で『諸君よ、諸君』とやり出したら大変だ〔96〕わ、直ぐ真下の往来で、通りすがりの連中が巷番に駆け込みの訴訟沙汰だわよ。と云ふのも『習うより馴れろ』でね。練習をやるでせう。勢、狂人だと思はれるの当然だわ。私が兄さんだつたら、此の西洋舘にたてこもつて、とても本気でやるわよ。兄さんこそ大いにやつてよ。正に別天地、理想的練習場よ。おやりなさいつてば！』

『馬鹿なこと！』

『馬鹿なもんですか。現に早大の境内先生の、セツクスピヤのお講義と来たら、天下一品の定評よ。あれ程の文豪には、どうせ末輩の僕など、及びもつかぬと、一座の御遠慮はさることながら、ですよ。でも折角教授と云ふ天職に居て、惜しいぢやないの、真面目に勉強

なさらない？』
『ハツハツハ斯様やぢられては、堪らんね』
『やぢつてなんかゐませんわ、折角の此の西洋舘、大いに御利用なさらないの、嘘言だわよ。此何？』
〔97〕『解つた。僕も大いに力戦するよ。三珍社の系列紙にペンを執る、それには弁論の練習も不要だ。たゞ熱烈な注意と、確呼たる意欲をもつて、覚悟の決心一つだ、すべては足りる』
教授はミセスに云つた。
『処で君に頼みがある。此際君も決心して、断然英語の勉強を始める事だ』
『薮から棒に、そんな無理な事〜〜』
『薮から棒な話ぢやない。僕の持論だ。君だつて聞きあきた位だよ。一躍和尚になれとは云はぬ。無理なもんか。君は結婚後、手ほどきのもみぢ葉から、長唄を始めた人だ。少なくとも松のみどりか、松風しかその位な、英語の素養もある君が、今覚悟の意欲と努力をもてば、何が難かしいものか。現に君は母性愛の意欲で、愛児のかたことを知り得たと、今の先き、発表したではないか』
『だつて――』
『だつては無い。此際長唄のテントンシヤンを全廃して、一意英語に没頭する。母性愛の〔98〕最高意欲に比べて、遥かに下の段階位、何をためらう、何を愚図つく、決心一つで容易に得られる、意欲の段階だよ』
美子が見兼ねて、そつと耳語した。
『口答の応戦一切無用。東郷大将のZ旗よ』
『援軍たのむわ』
『美子、何をこそこそやつてゐる？』
晴天なれども浪高し。
『聴講生の同意を求めて、暫く聴講欠席にきめたわよ――その理由は、一度にいろいろ□□し切れないのよ。その上に今度又、意欲の段階まで一々細微に■る、所謂相対性高低及び其の深浅と云ふ、最新の例題が附加されては、到底一度に呑み切れません。後日改めて拝聴させて頂くわ』
『云つたね』
『如何？ちよいと気を変へてお聞きにならない？御吹聴したい、好いのがあるわよ』
美子は笑つて、小声で唄ふ。
『猫は元来マスタアは嫌ひ、クサミが〔99〕出て来りヤ猫喰はぬ。デツカンショ！
『ウフフ。馬鹿にマスタアが利いてゝ、辛刺だね。君の創作かい？』
『まさか』
『言葉をにごす処が怪しいね。諾か否か』
『まさかと云つてるわ』
『逃げたね』
『秋目先生も斯様いつまでも、猫につきまとわれては、大変ね』
『秋目先生、又デカンショでやられたの？』
『蛙の面に水で、度重なると案外平気さ』
『おまけに現役教授と違ひます。ねえ』
『そのデカンショの意味知り度いわ』
『秋目先生がずつと以前、博士号をお蹴りになつたわね。それを文学博士の学位で利かし、坊つちやんに出て来るクサミ先生に西洋辛子をきかして、ハツクショイ、ねえ？』
『それが一通りの戯言だが、裏に裏あり、猫なら兎も角、もう坊つちやんも出て来た。余り度々では、博士号も鼻について喰へるかい〔100〕、馬鹿士にするない、デツカンショ！』
『随分深刻ね』
『深刻と書かないで、辛子の辛を使つてさ、辛刺と書くことだ。もつと辛子が利くよ』
『アラ、本当だわ』

『美子のその創作と違つて、坊主がべうぶに坊主を画いたの、焼き直しだがね、こんなの如何だい？
ジョウクガジョウズダ。ジョウズナジョウクダ。ジョウクガジョウズダ。
『一気に三度続けて云ふのさ、云へるかい』
『ジョウクガジヤウズダ。ジョウズナジョウクダ。ジョウズナ――』
『アラ、間違つた。云へないわ』
『ジョウクガジョウズダ。ジョウズナジョウクダ。ジョウクガジョウズダ。』
美子が急に起たつた。
『では、今日はこれでおしまひ』
『何だ、もう帰るの？』
『左様よ。左様なら！』　（完）

【注】

※「デツカンショ」（1）（本誌前号）と（2）（本号）の注を併せて掲載する。各項目冒頭の（　）内の数字は元原稿のページ数である。

（1）デツカンショ……デカンショ節に由来する。兵庫県篠山市周辺で江戸期から歌われてきた盆踊り歌が、明治期に第一高等学校の生徒たちによって広められ、各地の高校に伝わったとされる。弊衣破帽、バンカラの気風で知られる旧制高校の学生寮では、真夜中に大声をあげたり乱暴狼藉して寝ている者を起す蛮行・ストームが行われたが、その際にもデカンショ節は寮歌とともに愛唱された。デカルト、カント、ショーペンハウエルを愛読する旧制高校生のエートスを象徴する歌である。丘の蛙『寮のささやき　一高三高学生生活』（磯部甲陽堂、大正五年）では、「デカンショは愉快な訳だ。陽気な歌だ。元気に満ちた青年には全くよく調和する」とあり、陽気で愉快な雰囲気を醸し出す言葉といえるだろう。本作の中では、そうした旧制高校の気風を模倣しつつ行われる攻防に際して、リズムよく互いにかけあう感嘆詞・はやし言葉として用いられている。

（1）石門……御影石などの大きな自然石を使った門。植村家の象徴となっている。

（1）万里子……本作の作者・岡田（永代）美知代の兄・岡田實麿の長女・都子がモデル。日本女子大学で英文学を学ぶ。美知代は都子をかわいがり、都子も美知代に親しみと敬愛の念を抱いていたらしい。都子のご子息（岡田實麿の孫）・百瀬伸夫氏のご教示によれば、百瀬家は、第二次世界大戦中に松本に疎開していたが、都子が大病をして「美知代叔母に一目会いたい」と切望したために、美知代は広島県の庄原から汽車を乗り継いで会いに来て、数日宿泊したことがあったという。

（1）きたや……女中の名前。後出の「うらや」も同じ。作中の植村家のモデル・岡田實麿家では、郷里の広島県上下町から手伝いの女性を呼び寄せていた。

昭和初期に上下町から岡田實麿邸にお手伝いに行っていた前田露子さんの話を、二〇〇二年に上下町「文化塾」のメンバーが聞き取りをしている（府中市上下歴史文化資料館より提供）。

私は昭和十年から十七年まで東京の岡田家に居りました。

實麿先生は、書斎や応接室・茶の間など、いつも何かを書いていらっしゃいました。毎日多くの方たちが訪ねて来られ、本当に忙しそうでしたが、皆さんに丁寧に接しておられました。私は奥さんと一緒にお茶を出したり、長く居られる方にはお食事の仕度もしたりしました。訪ねて来られる方々は、大学の関係者、政治家、出版の関係者、教え子の方々（その中には近衛文麿さんもいらっしゃいました）などさまざまでしたが、先生は、いつも紳士で穏やかでした。

實麿先生が体調を崩されてからは、自宅で療養をしておられたので、子どもの時の事など、いろいろなお話をして下さいました。きっと忙しくされていたらこんな事はなかったと思いますが、その時のことが、本当に懐かしく思い出されます。

上下からも沢山の人が訪ねて来られました。お忙しかったので全部の人に会うことは難しかったのですが、そのつど先生は心に掛けておられました。本当にお優しい方でした。

(1) 母様……植村直美。岡田實麿の妻・直がモデル。一八八六（明治一九）年六月、岡山県苫田郡村（現・津山市）生まれ、士族。父は土居通政。作中時間における土居家の当主は直の兄・通博で、土居銀行頭取、津山銀行取締役であった。

(3) 教会……植村家のモデルとなっている岡田實麿の一家はクリスチャンである。

(7) 万里子の父様は、此の石門の主人で、英語の教授だ。……植村孝麿。美知代の長兄・岡田實麿（一八七八～一九四三）がモデル。広島県甲奴郡上下町生まれ。同志社、慶応義塾、米国オベリン大学を卒業し、帰国後は、一九〇三（明治三六）年に神戸高等商業学校、一九〇七（明治四〇）年に夏目漱石の後任として第一高等学校教授となった。その後、一九二四（大正一三）年に明治大学に移り、第一外国語学校や東京高等受験講習会（後の駿台予備学校）でも教えて、看板教授であった。英語学が専門で、英語の学習参考書の刊行が多く、没後も改訂されて一九七〇年代後半まで読み継がれた。

岡田實麿
（府中市上下歴史文化資料館所蔵）

(8) 地方によつて、この二つの言葉の意味を、一緒くたにごたまぜして、どんな場合にも、行動の意義を持つ処の、如何しての一点張りで押し通し、……行動（ＨＯＷ、どのような手段で）を表現する「如何して」と、原因（ＷＨＹ、どのような理由で）を表現する「何故」とは峻別されるべきであるのに、直美が方言によって両者を混用してしまうことが、言語の専門家とされる植村教授によって問題視されている。ただし、各種辞書類では、副詞「どうして」は、「（疑問や推量を伴って）原因・方法についての疑問を表わす語」・「（イ）どうやって。どんなふうに。」「（ロ）何故。どういうわけで。」（『日本国語大辞典』）とされており、原因を表す「どうして」は必ずしも特定の地域でのみ使用される語ではないようである。

(8) □準語（ひょうじゅんご）の本家本元、東京育ちの万里子には、母様の方言的如何しての疑問詞が、頓と通じる訳がない……標準語を方言より上位におく作者・永代美知代の言語観（それは、この当時一般の言語観でもある）が示されている。

(12) 年に一度、親兄弟の顔を見に、郷里に行かせると、斯様約束すれば、けろりと治るね。……大正中期には、女中が払底していて、その去就は雇用者にとって大きな問題であった。清水美知子は、女中不足の理由として、第一次世界大戦後の好景気を背景とした女中以外の就業機会の増加や、前近代的な雇用関係の忌避のほか、都市の新中間層の台頭により女中雇用層が増加したことをあげている（『〈女中〉イメージの家庭社会史』世界思想社、二〇〇四年）。加藤常子『女中の使ひ方』（婦人之友社、一九一三年）では、「子供つきの女中」は子供好きで正直でなければならず、「若いものゝ方が子供の相手によからう」と十五歳の少女を雇った例が示されている。雇用者の実家の縁故で都市に女中として招かれた年若い初奉公の少女が、ホームシックになるのは当然であろう。

(13) 東中野の高台、三千坪以上の、高等住宅地域でもつて、石門の

植村さんで通る広大な門構えだ。……「植村孝麿」のモデルとなった岡田實麿の住所は、『日本紳士録』（交詢社）によれば、大正二年版（大正元年一二月）では「本郷区駒込富士前町三」、大正三年版（大正二年一二月）では「本郷区富森町三」であったが、大正四年版（大正三年一二月）で「豊多摩郡中野町中野一〇三二」に転じている。この住所は、東中野駅（中央本線）のやや南側に当たる。

明治三〇年一月に町制となった中野町の住民構成は、明治末から大正期にかけて「軍人・官公吏・知識人」が目立つようになり、大正四年には全体で二六九一戸のうち、「軍人六六人、官公吏および雇傭人一三二人、学校教員・弁護士・医師・新聞雑誌記者・宗教家など八三人もおり、知識人の町というイメージが早くも芽ばえてきていることがわかる」とされる（関利雄・鎌田優『中野区の歴史』名著出版、一九七九年）。

(13) 一高……第一高等学校。現在の東京大学教養学部。竹内洋によれば、「旧制高校は近代日本の指導者や知識人を多数輩出した学校」であり、「旧制高校という社会化（価値・知識・技能などを習得する過程）装置を抜きに近代日本社会を考えることはできない」とされ、「旧制高校的なるものというのは、学歴貴族文化」のことだと言う（『学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社、一九九九年）。とりわけ第一高等学校は、長く唯一の帝国大学であった東京大学の予備門を前身としており、超エリートコースであった。

(14) 主として高等学校生徒を対象とした、所謂教科書の参考書、或は受験問題の例題……實麿は多くの参考書を執筆したが、ことに一九二一年（大正一〇）に開文社から刊行された『英作文着眼点』は「日本人学習者が間違えやすいところを赤字で添削している」特色をもつ「英作文参考書史上に残る傑作」であり、大ヒットして、戦後も改版され広く読まれた（江利川春雄『受験英語と日本人』研究社、二〇一一年）。

(14) 印税……書物の定価や部数に応じて、発行者が著者・編者などに一定の割合で支払う金銭。著者は発行部数の確認のために、書籍の奥付などに押印したり、押印した紙片（検印紙）を貼った。

(14) は猫……一九〇五年から翌年にかけて雑誌『ホトヽギス』に連載された、夏目漱石の最初の長編小説『吾輩は猫である』がモデル。同作の略称は、同時代評から一貫して「猫」が多く、「は猫」の略称が通用していたのかは不詳。読みも「はねこ」か「わねこ」か不明である。

(14) 秋目さん……夏目漱石（一八六七～一九一六）がモデル。岡田實麿は漱石の後任として、第一高等学校教授となった。

(14) 『彼れ是れ、十年になるね』……漱石が一高・東京帝大教授を辞して朝日新聞社に入社したのは、一九〇七（明治四〇）年三月で、岡田實麿は同年九月に漱石の後任として一高教授となった。本作「デツカンショ」の作中時間は、それから一〇年後の一九一七（大正六）年ごろということになるが、作中には漱石没後を思わせる記述がないため、實麿が中野に転居した一九一四（大正三）年から漱石が亡くなる一九一六年（大正五）年あたりに設定されていると見なせよう。

(15) 植村教授は（中略）本当に用へて役に立つ英語の、それでかなり評判の教授であった。……江利川春雄によれば、「留学経験のある岡田は、日本の英語教育は「読解に偏することなく、書くことや会話（聴き、話すこと）も重視すべき」というのが持論だった」という。また、實麿は「英作文の作り方」で、「①邦文に囚われないこと」「②なるべく平易な普通の字句を用いること」「③文法の要領骨子を会得すること」の三点をアドバイスしており、江利川は「簡潔ながら、内容は的確で、現在でも大いに参考になる」と評価する（前出『受験英語と日本人』）。

(15) 神戸高商……神戸高等商業学校。現在の神戸大学。

(15) 同志社……一八七五年、新島襄が「基督教主義を以て徳育の基本」とすることを趣意として、京都に同志社英学校を設立した。現在の同志社大学。岡田實麿は同志社を卒業しており、美知代の夫・永代静雄も同志社に学び、『新島襄言行録』(内外出版協会、明治四二年一月)を著した。

(15) 慶応……一八五八年(安政五)に福沢諭吉が中津藩の江戸藩邸に開設した蘭学塾が前身。現在の慶応義塾大学。一八九〇年(明治二三)に「大学部」称する専門課程を設けた。綿谷秋堂『大学と人物　各大学卒業生月旦』(国光印刷出版部、大正三年)には「殊に実業界は慶大の花で且つこれが生命である」とあり、当時から財界に多くの出身者を送っていた。一方で、『慶應』は奢侈の風を増長し、にやけたる若旦那の如き者も多く」といった評価(吉野鉄拳禅『党人と官僚』大日本雄弁会、大正四年)もあり、よくも悪くも富裕なお坊ちゃんのイメージが流通していたと言えよう。岡田實麿は慶応を卒業したのち、アメリカに留学した。

(15) 世を挙げて官閥ならではのその当時、所詮は私学の悲しさ……宗像和重は、「わが国の高等教育制度」は「官立の帝国大学によって独占」されたと解説する。(「旧制高校と大学」(『コレクション・モダン都市文化57　旧制高校と大学』ゆまに書房、二〇一〇年)

ところで、明治一九年(一八八六)の「帝国大学令」によって、学位授与機関としての「大学」が帝国大学に限られ、高等中学校(のち高等学校)から帝国大学へという官立の進学ルートが確立することによって、明治初期ごろから設立されていた私塾・私学は「諸学校」としての地位に甘んじていた。そのなかで、明治三六年(一九〇三)に「専門学校令」が制定され、「大学」の名を冠した専門学校が認可されることになった。この適用を受けて、明治・立教・東京法学院(のちの中央大学)・哲学館・立命館・同志社などの私立学校が「大学」と改称、(中略)慶応義塾は明治二三年(一八九〇)から独自に「大学部」と称する専門課程を設けていた。しかしこれらは、名称を冠することが可能になったというだけの擬似的な「大学」であり、卒業者に学士号を授与できる正式の高等教育機関としての「大学」というわけではなかった。

(15) 一高の校長、古渡辺博士……新渡戸稲造(一八六二〜一九三三)がモデル。キリスト教徒の農政学者・教育者。新渡戸は、漱石が一高を辞任して朝日新聞社に入社した明治四〇年当時の一高校長であり、岡田實麿は新渡戸に請われる形で一高に就職した。新渡戸は、籠城主義であった従来の一高を教養主義的な方向へ転換させた校長として知られている。

實麿の孫である百瀬伸夫(電通元副社長)は、次のように回想している(『良い広告とは何か』「終章　美しい心、美しい場所に育つ」(ファーストプレス、二〇〇九年)。

私の母方の祖父は、広島県の上下という美しい町で生まれ育った。日本で二つの大学を卒業した後、アメリカのオハイオ州にあるオベリン大学に学んだ。帰国後、旧制一高で英語の教師をするよう新渡戸先生(当時、校長)から乞われ、祖父は何年も新渡戸先生のもとで働いた。／(中略)／私の祖母はかなり長生きした人だが、何度も新渡戸先生のことを聞かされた。祖母は、祖父のところに立ち寄られた新渡戸先生と挨拶を交わしたことを誇りに思っていたのだろう。そんなわけで、幼いころから先生のことを耳にしていたのである。

(16) 同窓同期の友人、同志社出の一人……「K新聞編輯局長」(18)の、この實麿の友人について、大西小生は、国民新聞編集局長の伊達源一郎だと推定している(http://book.geocities.jp/ohnishi_shousei/alice/diary14_04.html)。大西によれば、伊達と實麿が非常に親しかったことを、美知代の夫・永代静雄が回想録「先生を繞(めぐ)る数氏と私」(『蘇峰先生古希祝賀　知友新稿』)に記している。

伊達源一郎（一八七四〜一九六一）は、新聞記者、政治家。同志社卒。一九〇〇（明治三三）年に国民新聞に入社し、一九一二（明治四五）年に編集局長。のち、読売新聞に転じて主筆に。戦後、島根県から参議院議員となり、サンフランシスコ講和会議の全権委員代理として外国新聞対策に当たった。

(17) 和日……「日和」の誤り。

(18) K新聞……『国民新聞』がモデル。

(18) 益富蕗峰先生……徳富蘇峰（一八六三〜一九五七）がモデル。熊本出身で、同志社英学校に学び、一八八七（明治二〇）年に民友社を設立して、総合雑誌『国民之友』を創刊。さらに一八九〇（明治二三）年に『国民新聞』を発行して社長兼主筆を務めた。

(18) □□千万……迂闊千万

(19) 心胸……心境

(21) 英国剣橋大学……オックスフォード大学と並ぶイギリス最古の私立大学。ロンドンの北方にある。漱石は、一九〇〇（明治三三）年に、文部省の給費留学生として二年間のイギリス留学を命ぜられた。ケンブリッジ大学に赴いたものの聴講は断念し、ロンドン大学の聴講生となり、のちにシェークスピア学者クレイグ博士の聴講生となった。したがって、本文の「英国剣橋大学の免状が官費で手に入る」は誤りであり、新聞編集局長ですら誤情報を信じていた当時の状況がかいま見える。

(21) 〆るように餅の皮をむく……「栄耀に餅の皮を剥く」。餅はそのまま食べるものであるのに、ぜいたくに馴れると、その皮までむいて食べるようになる。度を越したぜいたくなさまを示すことわざ。

(21) 博士号を（中略）蹴飛ばした……一九一一（明治四四）年、夏目漱石は文部省の専門学務局長宛に、「然る処小生は今日迄たゞの夏目なにがしとして世を渡つて参りましたし、是から先も矢張りたゞの夏目なにがしで暮したい希望を持つて居ります。従つて私は博士の学位を頂きたくないのであります。此際御迷惑を掛けたり御面倒を願つたりするのは不本意でありますが右の次第故学位授与の儀は御辞退致したいと思ひます」（二月二一日）と手紙を書き、文学博士号授与の辞退を表明した。ところが、手紙と行き違いに、自宅宛に証書が送られ、夏目家では返送したものの、授与が有効かどうかで論争が起き、新聞紙上を賑わせた。

(22) 印税の利率の高い事……漱石は自身の印税に関して、「それからアトの収入は著書だ。著書は十五六種あるが、皆印税になつて居る。すると又印税は何割だと云ふだらうが、私のは外の人より少しは高いのだそうだ」と述べている（「文士の生活　夏目漱石氏―収入―衣食住―娯楽―趣味―愛憎―日常生活―執筆の前後」『大阪朝日新聞』一九一四年三月二二日）。この他の人より少し高い印税というのは漱石が独自に出版社と結んでいた印税契約のことで、『鶉籠』の場合、初版一割五分、第二版からは二割、さらに六版以降（のちには四版以降）は三割と言ったものであったが、これが出版界の噂になり、漱石は三割一分も印税を取るという風評が立っていたという（松岡譲『漱石の印税帖』朝日新聞社、一九五五年）。

(22) 洛陽の紙価をして為めに高からしめ……著書がもてはやされ、よく売れることのたとえ（「晉書―文苑左思伝」）。

(23) 教授の年棒が何程か……漱石の朝日新聞入社前の収入は、妻の夏目鏡子によれば、印税をのぞいて、「大学が年八百円、一高が年七百円、それに明治大学の方が漸く月三十円位の見当」であった（『漱石の思ひ出』、岩波書店、一九二九年）。

(23) ビイヤモネイ……beer money。酒代、心付け。

(23) 久米の仙人が間違つて落こちた……久米仙人は伝説の仙人で、天平年間に大和国の竜門寺で飛行の術を学んだが、吉野川で洗濯する女の白いはぎを見て通力を失って墜落してしまったという（『今昔物語集』巻一一）。

(26) 蛮風の一高……出口競『全国高等学校評判記』（敬文館、一九一二年）には、一高の校風として「剛健」「尚武」「弊衣」「破帽」といった言葉が記されている。「向ケ丘のデカンショ気質」(28)・「向ケ丘の大蛮カラ」(28) なども同様。

(28) ハイカラ……英語のhigh collarに由来。明治期に洋行帰りの人々が高襟を着ていたことから、西洋風で目新しいものを真似たり、気取ったりするさまや人を指す。

竹内洋は、明治三十年代に「ハイカラ」という言葉が登場することで、対立項の「蛮カラ」という用語が析出されたという。「「ハイカラ」という用語の出現時には軽薄や虚飾家、「灰殻」などと否定的な意味あいも強かったが、しだいに肯定的用語になっていく。そのぶん「蛮カラ」の分がわるくなる」と指摘する（前出『学歴貴族の栄光と挫折』第四章）。こうした蛮カラな運動部的学生文化を、「西洋文化を中核にした教養主義へと転換」させたのが、岡田實麿を一高に招聘した新渡戸稲造校長であった。

出口競『全国高等学校評判記』（前出）の第一高等学校「十三、教授評判記」には、「校内唯一のハイカラは岡田教授（實麿）を以て随一とすべく、同時に出勤時間の最も遅きも又た此の先生である」とある。「ハイカラ」は、一高にあって實麿の代名詞であった。

(29) 坊つちやん……『坊つちやん』は、一九〇六（明治三九）年四月に『ホトヽギス』に掲載、翌年『鶉籠』（春陽堂）に収録された夏目漱石初期の人気作。江戸っ子の「おれ」は地方の中学校（四国松山と思われるが明記はされていない）に赴任するが、生徒たちに、食べた天麩羅蕎麦や団子の数や温泉で泳いだことを揶揄され、宿直時には蚊帳にイナゴを入れられるといったイタズラの洗礼を浴びる。

(31) 歴とした秋目門下……「木曜会」に集った漱石の門下生たちがモデル。芥川龍之介、阿部次郎、内田百間、久米正雄、小宮豊隆、鈴木三重吉、寺田寅彦、野上豊一郎、野上彌生子、森田草平、和辻哲郎ら。その多くが一高の出身であった。

(32) 丸持ち……金持ち、富豪。

(35) 涼しい顔の胡瓜（キウカンボウ）……胡瓜を用いた英語の慣用句as cool as a cucumberに由来する。涼しい顔、非常に冷静な、の意味。

(39) 天下の三越……東京都中央区日本橋室町に本店がある百貨店。一六七三（延宝元）年三井高利創業の呉服商越後屋に始まる。一九〇四年三越呉服店と改称し、一九二八年に三越となる。長く日本の消費文化の中心の位置を占めた。

(39) 風月……上野風月堂。創業一七四七（延享四年）年、開業一九〇五（明治三八）年の菓子店。

(42) 菊兄い好みの塩煎餅……六代目尾上菊五郎の演じた「助六由縁江戸桜」のせりふにもとづいたもの。助六の弟分である朝顔仙平は、実在のせんべい屋「朝顔煎餅」とかけられており、「事も愚かや、この糸鬢は砂糖煎餅が孫、薄雪煎餅はおれが姉、木の葉煎餅とは行逢兄弟、塩煎餅が親分に、朝顔千平という色奴だぞ」と名乗る場面がある。

(42) 美子……永川美子。作者の永代美知代（一八八五～一九六八）がモデル。旧姓は岡田。美知代は、広島県上下町出身の小説家・翻訳家で、田山花袋「蒲団」の女学生・横山芳子のモデルとして知られた。作中時間の大正五年前後には、雑誌『少女世界』を中心に少女小説を執筆していた。単著『ケーザル』『花ものがたり』の刊行は大正六年である。

(43) とゆ……樋（とい）が転じたもの。雨水を軒先で受けて流すために設けられた細長いしかけ。

(46) 長唄……三味線音楽の一種目で、歌舞伎の伴奏音楽として発達した。明治以降はお座敷や演奏会形式でも演奏されるようになり、大正時代には四世杵屋佐吉の長唄芙蓉会などの活動もあって隆盛し、素人も稽古に通った。

(48) 頭痛鉢巻……江戸時代、病気や片頭痛の際に、漢方薬の紫根で染めた縮緬の鉢巻を頭に締めることで症状が緩和されるとされていた。この病鉢巻は、額の左側に結び目を作って締める決まりとなっており、歌舞伎では病人や心を病んでいることを表す象徴となっている。

(49) 長者議員……貴族院議員は皇族議員・華族議員・勅任議員（勅選議員と多額納税議員）によって構成されていた。ただし、多額納税議員が主導権を握ることはほとんどなく、揶揄的な意味合いをこめて長者議員とも呼ばれた。

直美のモデルである直の兄・土居通博は多額納税者で、一九〇六（明治三九）年に貴族院議員となった。

(49) 麹町……皇居の西側、江戸城外堀の内側に位置しており、丸ノ内、日比谷、霞ヶ関、永田町などを含む。山の手の高台にあり、江戸時代には武家屋敷が並んでいたが、明治時代になると政治、経済の中心地、政財界の有力者の邸宅が並ぶ高級住宅地として発展した。

(50) 今日は三越、明日は帝劇……一九一一（明治四四）年、帝国劇場が開設されると、無料配布のプログラムに「今日は帝劇、明日は三越」というコピーが掲載された。制作は三越の広告担当の浜田四郎。この文句は、当時の有閑階級の女性の生活を象徴するものとして流行語となった。

(50) めいせん……銘仙は、絹の練糸などで平織にした絹織物の一種。明治以降、日本人の衣服に広く用いられた。庶民にも比較的に手にしやすく、職業婦人や女中なども外出着として着用した。ここでは、派手に着飾る嫂・直美とは対照的な、美子のつましい暮らしぶりを示している。

(50) 朱子……繻子織りにした織物。光沢があり、洋服や帯などに用いられる。サテン。

(53) 秋本子爵……正しくは秋元子爵。旧上州館林藩藩主であった華族。本作作中時間の大正五年前後の当主は、秋元興朝。なお、館林は、美知代の師・田山花袋の出身地であり、美知代は館林を訪ねたことがあるという（『蒲団』、『縁』及び私）。

(53) 房州砂……千葉県館山近辺で産出する磨き砂で、器具の研磨や塗料材に用いる。

(55) 鰤……成長にしたがって呼び名が変わる出世魚で、西日本では歳暮に贈る習慣がある。

(55) 備後表……広島県東部（旧備後国）で栽培されるイグサで織った良質の畳表。美知代の実家のある上下町は旧備後国である。

(55) 表替……畳のおもてを新しいものに取り替えること。

(56) 本郷向ヶ丘の阿部屋敷……旧備後福山藩主・阿部家の屋敷で本郷区駒込西片町（現・文京区）にあった。作品の設定時間である大正五年ごろの当主は、伯爵・阿部正直。『風俗画報臨時増刊新選東京名所図会』（第五一編、「明治三〇年一二月二五日発行」と奥付にあるが、明治四〇年の誤り）では、「駒込西片町」では、「西片町十番地並に二十三番地以下、悉皆阿部伯爵家の所有地なり、その区域甚だ広く、南に伸び北を占め、全町内の八九分通りを領せり」とされる。

(58) よりよき半身（ベタアハアフ）……英単語「ベタアハアフ」（better half）について、嫂の直美は「伴侶」という訳語で覚えているだけであるが、美子は、天国で一つだった魂が現世で男女に分かれて誕生し、やがて邂逅する、その最も良き半身、という語義も理解していることが示されている。

(60) 鳩羽鼠……赤みがかった灰紫色。

(60) 着尺……おとな用のふつうの長着が一枚作れる長さと幅を備えた反物。

(60) 静海波……青海波。着物の染め模様の一つで、青い波を表し、円の弧を同心円状に重ねた形が鱗のように連続している模様。

(60) 三本絽……絽は、布地の縦あるいは横の方向にすきまを表して

涼しく織った夏用の織物。三本絽は、緯糸三本おきに経糸を交差させて織ったもの。

(61) 鴇紅色……トキの羽色に由来する、黄色がかった桃色。淡紅色。濃淡いずれも年齢に制限なく、幅広く用いられた。

(61) 絽縑……紗織りと平織りを併用して染め生地にした盛夏の着尺地。

(62) 東久邇の宮様……久邇宮朝彦親王の第九子である東久邇稔彦王が創立した宮家。作中では、東久邇宮稔彦王（一八八七～一九九〇）を指す。貴族院議員で、内閣総理大臣や防衛総司令官を歴任した。

(62) 伺候……貴人のもとへ参上して、ご機嫌うかがいをすること。当時、東久邇宮は実業家、軍人、政治家などと頻繁に面談していた。

(63) 進学させるには、少し撰り好みをすると、神戸か京都乃至は東京だもの、如何しても寄宿舎に入れる以外、方法が無い。……直や美知代が育った明治前期には、女子中学校は、十数校に限られ、公立高等女学校は京都府女学校（京都）、女学校（上野）、山梨女学校（山梨）、女学校（岐阜）、徳島女学校（徳島）の五校だけであった。他に現在の短大の元になる女子私塾が経営されたが、いずれも東京、大阪、京都に偏っていた。明治後期になると高等女学校令規が整備され、女子中学校も高等女学校もようやく比較的全国に及ぶことになった（桜井役『女子教育史』増進堂、一九四三年）。

(64) 香茸……革茸、茅蕈。食用きのこの一種で、乾燥させると香りが強い。

(68) お茶人……おちゃじん。一風変わったことを好む人。ものずき。

(68) 現にこの私がその代表的モデルだもの……美知代は、親の反対する相手・永代静雄との間の子を妊娠したために、一九〇九（明治四二）年一月、戸籍上は田山家の養女の形をとって静雄と結婚し、披露の通知状を出した。

(68) 兄は二度目の結婚で、最初の嫂に子供は残されなかったが……実麿は、一九〇三（明治三六）年七月に結婚した最初の妻・登美恵と、一九〇七（明治四〇）年八月に死別している。

(69) 十六銀行……東海地方に本拠を置く銀行。岐阜町界隈の商工業者が中心となり、渋沢栄一率いる第一銀行（当時は第一国立銀行）の指導の下、一八七七（明治一〇）年に第十六国立銀行として開設された。

(71) 永川（かねし）……美知代の夫・永代（ながよ）静雄（一八八六～一九四四）がモデル。静雄は兵庫県出身の新聞記者、小説家、翻訳家。著書にルイス・キャロル「不思議の国のアリス」の日本初訳『アリス物語』（紅葉堂書店、一九一二年）などがある。『中央新聞』『富山日報』など数紙に勤務したが、本作作中時間の大正五年前後には、『東京毎夕新聞』の社会部長であった。

(74) ブリツヂ……bridge。トランプゲームの一種。二組に分かれ、トリックプレーで得点を争うもの。

(76) 大島紬……鹿児島県奄美大島に産する絹織物。独特の気品と素朴な趣きをもつが、手数がかかるために極めて高価である。

(76) 井の字……井桁。井の字をひし形に図案化した文様。

(76) 蚊がすり……十字形の絣で蚊のように細かい柄で、男物絣柄の代表的なもの。

(78) 倶楽部椅子（クラブチェア）……クラブチェア。肘掛け付きで、革や布などで厚く張られた安楽椅子。

(82) アイ　ミス　ユウ……I miss you.「あなたに会えなくてさびしい」の意。

岡田實麿が書いた参考書『前後関係で覚える　標準英語単語の研究』（開文社・泰文堂、一九三五年）では、英語の受験準備をするうえで、英単語は「単独の意味を学ぶよりも、他の語との結合上の意味を明かにする方が効果が多い」として、例えば、いず

れも「恐ろしい」と訳されるtremendousとterribleは前後に付く語が異なり、おのづと語意も異なるとする例を上げる。「過去十五年間の入試問題を検討」して抽出した「最重要単語」のなかに、missも掲出されている。

miss［mis］a chance.　〔機を〕逸す。

1. *miss* my watch.　1〔時計〕のない事に気付く。

2. *miss* you very much.　2〔君が〕居なくて淋しい。

3. a bullet *missed*.　3〔弾が〕外れた。

(88) マホガニイ……センダン科の常緑高木。木目が美しく強固なことから最高級の家具材の一つとされ、これを用いた家具や調度品は富貴の象徴であった。

(88) 茶車（チャワゴン）……紅茶を飲む際に用いる、小さな車輪のついた可動式のワゴン。ティーポット、カップ、ソーサー、ケーキなどを乗せて運んだ。

(88) リプトン……イギリスの紅茶会社。一九〇六（明治三九）年、明治屋によって日本に輸入され、最も主要な紅茶ブランドとして上流階級を中心に広く販売された。また、創業者のトーマス・J・リプトンは、商売の成功者としても知られていた。

(96) 早大の境内（けいだい）先生……坪内逍遥（一八五九～一九三五）がモデル。評論家、小説家、翻訳家、劇作家、英文学者。東京専門学校（現早稲田大）の講師を経て、教授となった。『小説神髄』『当世書生気質』などの他、シェイクスピアの全作品の翻訳がある。

(97) もみぢ葉……長唄の一つ。吉原の遊女高尾太夫の身の上を唄ったもの。「宵は待ち」「黒髪」などともに初心者や子どもの手ほどきの曲とされた。

(97) 松のみどり……杵屋六翁が、末娘せいの改名披露の祝賀曲として作曲した。ごく短い曲であることから長唄の入門曲とされているが、一方でその表現に熟練を要し、長唄は「松の緑」にはじまり、「松の緑」に終わるとされている。

(97) 松風……松風・村雨伝説や謡曲「松風」を題材とする長唄「汐汲」のこと。在原行平を慕う海女の松風がその思い出をしのぶというもの。難曲として知られる。

(98) 東郷大将のZ旗……一九〇五（明治三八）年、日露戦争の日本海海戦で、司令長官の東郷平八郎が「皇国ノ興廃コノ一戦ニ在リ，各員一層奮励努力セヨ」の意を当てたZ旗を旗艦三笠のマストに掲げて士気の高揚を図った。

(98) 猫は元来マスタアは嫌ひ、クサミが出て来りヤ猫喰はぬ……夏目漱石『吾輩は猫である』の登場人物で漱石自身に該当するとされる苦沙弥と、漱石の文学博士号（マスター・オブ・アーツ）辞退事件とをかけた皮肉。

付記

1　前号に掲載した（1）の「解題」において、「原稿のページ番号は1から100までふられているが、85から92までの八枚が欠損したまま綴じられており、現存する原稿枚数は九二枚である」、「本作品は（一）から（七）の七節からなる」と記したが、右の八枚の原稿は現存する。欠けているのは77ページの一枚のみであり、現存する原稿枚数は九九枚である。また、全体の構成は、（一）から（八）までの八章である。お詫びして、訂正する。なお、77ページは元原稿に存在しないものの、76ページから78ページへは内容的に自然に接続している。作者の美知代がページ番号を打ち誤ったもので、作品は完結していると判断しうる。

2　本資料「デツカンショ」の「解説」は、『表現技術研究』第一二号（二〇一七年三月三一日）に掲載予定である。本翻刻と併せてご高覧いただきたい。

3　本研究は科研費（26370238）助成による成果の一部である。本資料の公開をご許可くださった著作権継承者の方々、閲覧の便宜をおはかりいただいた府中市上下歴史文化資料館にお礼申し上げます。

(Reprint) Nagayo Michiyo “Dekkansho” (2)

Nobuko ARIMOTO
Taiki ITAKURA
Keita MANDA
Saya KUMAO

Nagayo Michiyo (formerly Okada Michiyo) (1885－1968) is a female writer from Hiroshima, known as the model of Tayama Katai’s novel, “Futon”. However, Michiyo also wrote novels, girls’ novels, herself as well as translating several works from the end of the Meiji era through to the Taisho period.

This paper presents a transcription of the manuscript “Dekkansho”, an unpublished novel from the author’s late years. This is a story about Michiyo’s brother and the successor of Natsume Sōseki as a professor at “The First Higher School, Japan”, Okada Jitsumaro and his family.

The latter half of the novel and notes are published in this issue.